

シリコンバレーから見た米国のITトレンド

八木晃二

上昇に転じたユーザー企業のIT投資額

調査会社 IDC のデータによれば、2000年のネットバブル崩壊以降、減少を続けていた米国ユーザー企業のIT（情報技術）投資額は、2003年度後半から前年度比で上昇に転じ、2004年度は約4%の伸びが予想されるという。ベイエリア（シリコンバレー周辺の呼称）の500人のCEO（最高経営責任者）に対する調査でも、今後の景気回復を楽観的に見る向きが増えている。

実際、米国のGDP（国内総生産）成長率は、2003年第3四半期に8%台と過去最高の伸び率を記録し、その後も4%前後の堅調な伸びを見せている。

ただ、ユーザー企業はITにやみくもに投資するわけではなく、企業戦略と技術戦略に基づき選択と集中を強める傾向にある。現在ユーザー企業の関心が高い分野として、まずセキュリティ技術があげられる。また、システム開発コストの削減、他システムの活用、

システムの連携という観点から、ウェブサービス関連技術および無線関連技術への注目度も高い。

さらに、アウトソーシングも、単なるコスト削減を目的とした単純な運用やレガシーシステム開発だけでなく、会社はコアに集中して、それに無関係な部分は先端的な部分であってもアウトソーシングの対象とする企業が増えてきた。失業率の上昇という問題を抱えながらも、アウトソーシングの活用による企業の競争力強化は、着実かつ静かに進行している。

ベンチャーキャピタルの投資額も増加

最近のシリコンバレーで注目を集めている話題の1つにグーグルのIPO（新規株式公開）がある。これにより多くの億万長者が生まれるため、シリコンバレーの起業家精神と投資レベルの高揚が期待されている。実際、2004年第1四半期のIPOによる資金調達額は27.2億ドルと、ネットバブルがはじけた2000年第3四半期以降で、

最も高い数字を記録した。

ベンチャーキャピタルの資金調達額も、明らかに増加へと転じている。調査会社ベンチャーワンのデータによると、ネットバブルのピーク時に四半期ベースで300億ドル弱だったベンチャーキャピタルの総投資額は、2002年に50億ドル弱まで減少した。2003年度第4四半期も50億ドルを少し超えた程度だが、久しぶりに増加傾向へと風向きが変わっている。

ベンチャーキャピタルの投資分野では、健康ブームを反映してヘルスケアの比率が高まっているものの、ITの比率が約6割と相変わらず高い。シリコンバレーを中心とするITベンチャー企業は、まだまだ活発な起業活動を試みているようである。

明暗分かれるベンダー企業

IBM、HP（ヒューレット・パッカー）、マイクロソフト、デル、サン・マイクロシステムズといった大手ITベンダーの売上高は、2001年以降サンを除いて増加

傾向にある。EDS、アクセンチュアといった大手システムインテグレーターの業績も堅調である。

また、前述のグーグルのIPOや、リナックス関連のスタートアップ企業の資金調達など、ITベンチャー企業も活発な動きを見せている。こうした企業が元気な分野としては、RFID（無線ICタグ）、無線LAN（ローカルエリアネットワーク）、企業セキュリティ、迷惑メール対策、インターネット電話、ERP（企業資源計画）ウェブサービス、メッセージングソフト、ストレージエリアネットワーク、リナックスアプリケーションなどがあげられる。

一方、競争社会の負け組にとって環境は厳しく、最近でもサンが3300人、ゲートウェイが1500人のレイオフを発表している。

また、IT企業の業績は回復しても、業務の海外移転が進んでいるため、GDPの成長に反し、失業率はなかなか下がらない。企業の競争力強化のためのオフショア化が、最終的に雇用増に結びつくのか、米国でも「雇用なき景気回復」が議論の的となっている。

ITの新トレンドはやはりシリコンバレーから

前述のように、ユーザー企業の

意識が好転し、ベンダー企業の業績も回復してきている。シリコンバレーの景気の実態を把握するには、こういった数字だけでなく、現地の様子を実際に見ること、知ることも重要である。

ベンチャーキャピタルの方々に話を聞いてみても、2003年後半から明らかに元気が出てきており、投資案件も増加傾向にあるようだ。多数のスタートアップ企業がアメリカンドリームを目指して、今もチャレンジを続けている。

また、この地域の高速道路も、一時のがらがら状態から抜け出して、以前ほどではないにしろ、車の量が増えてきている。高速道路の渋滞は、シリコンバレーの景気のパロメーターであるようだ。この地域の住宅価格も回復してきており、実際には東京23区以上のレベルにある。

このように、経済的には明るい話が増えてきた昨今だが、本当に回復基調にあるのか、まだまだ予断を許さないようである。シリコンバレーのあるカリフォルニア州の失業率は、全米の失業率を上回っている。NRIパシフィックでも、今春、シリコンバレー地域でIT技術者の採用活動を行ったが、依然として買い手市場であることを実感した。

また、地元のサンノゼ・マーキュリー・ニュース紙に掲載された「2003年3月以降、コンピュータ関連学部の学生数が減少している」という記事も、IT業界の将来を占う意味では気になる。さらに、シリコンバレーのオフィス空室率は全米で最も高く、住宅価格の戻りとは逆に、オフィス価格は低下し続けている。

中国やインドの台頭もあり、シリコンバレーへの関心度が多少下がった感は否めない。しかし、米国内のベンチャーキャピタル投資の約30%はこの地域に対してであり、断然トップである。

新しい技術や企業を生み出すべく整備された社会インフラ（ベンチャーキャピタル、エンジェル、インキュベーター、スタートアップ企業、弁護士、会計士、大学、地域社会）に加えて、創造を重視する文化的背景（多くの失敗よりも1回の大成功に注目し、それを目標とする）もあり、新技術への挑戦は相変わらず盛んである。ITの新しいトレンドは、やはりここから生まれ続けるだろう。

今後もシリコンバレーの動向に注目していく必要がある。

八木晃二（やぎこうじ）
NRIパシフィック社長